

ヴォルフとアイヒェンドルフ

I

吉 田 功

ISAO YOSHIDA : Wolf und Eichendorff

序

今日でも「ヴォルフの作品は難解である」と云われるが、しかしまぎれもなく彼はドイツリート史上、最大で最後の作曲家であった。何故彼の作品が難解に考えられたのかは、従来考えられてきたリートに対する概念の相違、つまりヴォルフ以前のリート作曲家の「詩と音楽」についての考察、そこから作り出されて来たリートの概念をはるかに越えているからであろう。詩に対する態度はシューマンの流れを汲み、さらに彼独自の世界を造っていった。つまり彼の作風の多様性はそれぞれの詩に対する完璧な理解を表わし、彼の靈感は彼の生命の炎が燃えつきる程、詩に対して真実の世界を追究したのであった。

この小論はドイツリートを学ぶ者にとって、ヴォルフの作品を抵抗なく楽しめるように、アイヒェンドルフ歌曲集の中から詩と音楽を、又それぞれの作品がいかに奏されるべきかを述べたものである。楽符は“Peters”版を使用した。アイヒェンドルフを題材としたのは、この論集・前号に「シューマンとアイヒェンドルフ」を述べたので、同一詩人をシューマンやヴォルフがどのように見ていたかも比較出来ることからアイヒェンドルフを選んだのである。

アイヒェンドルフ歌曲集

もし、アイヒェンドルフがシューマンのリートに現われたように、神秘的・幻想的な詩人だけであるなら、ヴォルフのアイヒェンドルフに対する態度は異っていたであろう。“Verschwiegene Liebe”や“Nachtzauber”等の感覚的な美しい魅力はもちろん存在したであろう。しかし“Der Freund”や“Der Musikant”或いは“Der Soldat”や“Der Schreckenberger”等の、さらに明るい人なみはずれたユーモアや情熱的な力、或いは真の友情への高い評価等、アイヒェンドルフの片面は現われなかったろう。以上の様な面をヴォルフがとりあげたことから「ヴォルフは音楽に対して新しいアイヒェンドルフを発見した」といわれる所以である。この歌曲集は20曲から成り、1888年にまとめられた。他の歌曲集のように集中的に書き上げたものではなく、7曲は1880年、1886年、1887年に書かれていた。

1 Der Freund

友 人

Wer auf den Wogen schliefe,	やさしく揺すられている子供のように
Ein sanft gewiegtes Kind,	波の上で眠っている者は
Kennt nicht des Lebens Tiefe,	甘い夢を見るあまり盲目となり
Vor süßem Träumen blind.	この世の深さを知らない
Doch wen die Stürme fassen	けれども、この世の嵐が
Zu wildem Tanz und Fest,	めっちゃめっちゃにした者
Wen hoch auf dunklen Strassen,	偽りの世界で暗い道の上に
Die falsche Welt verlässt :	見捨てられた者
Der lernt sich wacker rühren,	その人が夜と困難をのりこえて
Durch Nacht und Klippen hin	しっかりと働くことをおぼえ、
Lernt der das Steuer führen	信頼できるまじめな心をもって
Mit sichrem, ernstem Sinn.	舵をあやつることをおぼえる。
Der ist vom echten Kerne,	そのような人が本物だ、
Erprobt zu Lust und Pein,	喜びと苦しみに鍛えられ
Der glaubt an Gott und Sterne,	神と星を信ずる人
Der soll mein Schiffmann sein!	そんな人が私の船頭であってほしい!

この曲の構成は4部にわけられて、詩の各節の表象は、正確に音楽的に現わされている。“Wer auf den Wogen...sanft gewiegtes...süssen Träumen...”には、やさしく揺れる波のような三連音符、弱拍部に響く四分音符（譜例Ⅰ）の和音がついている。第二節を象徴する“die Stürme”と“wildem Tanz”には、緊張した響きの和音と三連音符が、さらに激しさを増すクロマティックの上昇形のダブルオクターブによって連結される。この短い符点のモチーフ（譜例Ⅱ）は、第一節との対称を見事に表現している。“...wacker rühren...Nacht und Klippen”は、符点のリズムが著しく支配している（譜例Ⅲ）。“Der ist vom echtem Kerne”から符点のリズムと並んで、再び上昇形のオクターブ群が鳴り出す。（譜例Ⅳ）しかし、ここではクロマティックではない。そして、この詩の最後の部分“der soll mein Schiffmann sein”は、最後の二小節に力強く書かれ、巾広い四分音符の和音の上にしっかりと構成されている。以上この曲を見ると、アイヒェンドルフの深遠で真面目な詩から、ヴォルフは彼の友への真実の姿を描いた事が分る。歌声部は言葉と旋律の間を変化しながら歌われ、ピアノ部は派手な劇的性格をもっている。全体的には、強く引立たせられた対比にもかかわらず完全に調和された偉大さがある。

(譜例 1)

Mässig. (Original-Ausgabe.)

Wer auf den Wo - gen schlie - ße, ein
Who on iij'e's sea would stum - ber, as

(譜例 2)

Doch wen die Stür - me fas - sen zu
But who mid tem - pests rag - ing has

(譜例 3)

sehr rhythmisch

lernt sich wak - ker rüh - ren, durch
i - mage ne - ver - fear - ing, with

(譜例 4)

etwas belebter, jedoch immer gemessen.

Der let von ech - tem Ker - ne, er -
He cares not what be - tide him, on

2 Der Musikant

音 楽 師

Wandern lieb' ich für mein Leben,
Lebe eben, wie ich kann.
Wollt' ich mir auch Mühe geben,
Passt es mir doch gar nicht an.

私は一生涯さすらいを愛する
私は自分に出来ることだけをして生きる
もし、私が苦労しようとしても
そんなことは、私にはむいてない。

Schöne alte Lieder weiss ich, In der Kälte, ohne Schuh', Draussen in die Saiten reiss' ich, Weiss nicht, wo ich abends ruh'.	私は美しい昔の歌を知っている 寒さの中で、靴もはかずに 私は外で絃をかきならず 夜に休む所も知らないで。
Manche Schöne macht wohl Augen, Meinet, ich gefiel' ihr sehr, Wenn ich nur was wollte taugen, So ein armer Lump nicht wär'.	多くの美しい娘が私にまなざしを向ける。 そうすると、彼女達に気に入られたと思う もし、こんなルンペンでなかったなら 何か役に立つのだろうか。
Mag dir Gott ein'n Mann bescheren. Wohl mit Haus und Hof verseh'n! Wenn wir zwei zusammen wären, Möcht mein Singen mir vergeh'n.	神様がお前に家屋敷を備えた男を さずけるだろう もし、我々二人が一緒になったら 私の歌はどこかへ行ってしまおうだろう。

この歌の構成は誠に単純に作られている。まず、三つの音を響かせながら始まる。陽気な右手の旋律はたえずくりかえされ、軽快な歌声部を導く。テキストの第一節と第三節はおなじ曲で書かれ、第四節は第二節を変化させたものである。歌い手にとって単純な曲ほど表現はむずかしい。この曲集第一曲“Der Freund”の様に、各節の文学的表象の変化を音楽的に表現された場合は、具体的に何をせねばならぬかを理解しやすいのだが、この“Der Musikant”のように単純な曲の場合、演奏家の役割は大きい。歌手の側には、注目すべき描写的要求がおかれている。つまり、各節の変化は彼等の内面的な権利にまかされているからである。もちろんその際にやりすぎはゆるされない。根本的に明かるい皮肉性を失なわないようにすべきである。ピアノの側には、速度の変化で性急性を要求される。ヴォルフは初めに“Sehr mässig”（中庸に）と書いた。そしてテキストに於ける皮肉なユーモアと陽気な16分音符のピアノ部を添えたこの“Der Musikant”は、愛らしく響く皮肉を彼の魅力に加えた。

3 Verschwiegene Liebe.

沈黙の愛

Über Wipfel und Saaten In den Glanz hinein, Wer mag sie erraten, Wer holte sie ein? Gedanken sich wiegen, Die Nacht ist verschwiegen, Gedanken sind frei.	梢や田畑の上 輝きの中につつまれている 誰がこの思いを読みとるだろう 誰がこの思いを胸にいだくだろう 思いは揺れる 夜は沈黙し 思いは自由である。
---	---

Errät' es nur Eine,	この思いを読みとるものはただひとり,
Wer an sie gedacht,	思いを胸に抱いているものだけ
Beim Rauschen der Haine,	森のざわめきのもとに
Wenn niemand mehr wacht,	だれもがもう眠りについた
Als die Wolken, die fliegen—	雲が流れて行く時
Mein Lieb ist verschwiegen	私の愛は沈黙し
Und schön wie die Nacht.	この夜のように美しい。

この曲の特徴は、なんといってもその響きにあるだろう。二節の有節歌曲で作曲されているが、たえまないそして美しい転調はその有節性を気づかせない。たびたびヴォルフの旋律はそのむずかしさから我々を妙な気持にさせる。けれどもこの歌曲に於て、その価値を新しい旋律においたのではなく、テキストの精神から発生させたということを我々は知ることが出来る。最初の“über Wipfel und Saaten”は本当に揺れている。“wer mag sie erraten”は、和声の変化によって神秘的な恐怖を感じさせる。“Gedanken sich wiegen”は開放的な三和音で、“die Nacht ist verschwiegen”は、三度の近親調を通した和声の微妙な変化で、思いが夜の中に溶け込んでいくようである。各行否、各言葉は歌の旋律を導く必然性を示しているようだ。夜の魔法のようなピアノ部には、繊細に波打つ和声移動が音程の可能性を追究している。ヴォルフがつけた主調 Gmoll は一度も響かなかった。

4 Das Ständchen

セ レ ナ ード

Auf die Dächer zwischen blassen	屋根の上でうすい雲の間に
Wolken schaut der Mond herfür,	月がのぞいている
Ein Student dort auf der Gassen	1人の学生があそこの通りで
Singt vor seiner Liebsten Tür.	恋人の戸の前で歌をうたっている。
Und die Brunnen rauschen wieder	泉は静かな孤独を通して
Durch die stille Einsamkeit,	再びざわめく
Und der Wald vom Berge nieder,	山からは森のざわめきがおりてくる
Wie in alter, schöner Zeit.	昔の美しい時のように。
So in meinen jungen Tagen	私の若かりし頃に
Hab' ich manche Sommernacht,	私もいくたびか夏の夜に
Auch die Laute hier geschlagen	ここでリュートを鳴らし
Und manch lust'ges Lied erdacht.	多くの楽しい歌をつくったものだった。

Aber von der stillen Schwelle	しかし、あの静かな敷居から
Trugen sie mein Lieb zur Ruh—	彼女は私の愛を永眠の中へ運んでしまった
Und du, fröhlicher Geselle,	お前、たのしそうな仲間よ
Singe, sing' nur immer zu!	歌いなさい、いつまでも!

夜の街に流れる若者の歌に、失われた青春をしのぶ“Das Ständchen”は、ヴォルフの作風の一面を見ることができる。明らかにここにも旋律の表現、非凡な和声進行、響きの繊細な感性は存在する。それらは主題の旋律とリズム関係を見れば（譜例5）、分るだろう。

(譜例 5)

Auf die Dä - cher zwi - schen blas - - - sen
 O'er the st - - lent vil - lage dream - - - ing,
dolce *mf* *p*
 Begleitung immer ppp

三つのモチーフとテーマが登場するこの場面、歌の線とピアノ部の右手と左手のそれぞれの線が全て異ったリズムを持ち、最後まで自分の領域を守る。それらが構成する優美なポリフォニーは、種々のリズムを経てさらにポリリズムへと昇っていく。調弦を表現した前奏は、セレナーデの気分をさらにもりあげる。

5 Der Soldat

兵 士

I

Ist auch schmuck nicht mein Rösslein,	私の馬はスマートではない
So ist's doch recht klug,	けれども、大変かしこい
Trägt im Finstern zu'nem Schösslein	暗闇の中、小さなお城に
Mich rasch noch genug.	すばやく、まちがいがなく私を運ぶ
Ist das Schloss auch nicht prächtig,	その城は立派ではないが
Zum Garten aus der Tür	その戸口から庭へ
Tritt ein Mädchen doch allnächtig	ひとりの娘が、夜ごとに
Dort freundlich herfür.	私を歓待する。
Und ist auch die Kleine	又、そのかわいい娘は
Nicht die schönst' auf der Welt,	世界一の美人ではない

So gibt's doch just keine, それでも、もっと気に入る人なんか
Die mir besser gefällt. どこにもいない。

Und spricht sie vom Freien, もし、彼女が結婚をいいたしたら
So schwing' ich mich auf mein Ross 私はすぐに馬にとび乗る
Ich bleibe im Freien. 私は自由がいい
Und sie auf dem Schloss. 彼女はお城に住めばいい。

II

Wagen musst du und flüchtig erbeuten おもいきってす早くやらねばならない
Hinter uns schon durch die Nacht 夜を通して、もう我々のうしろから
hör' ich's schreiten, 追いかけてくるのがきこえる
Schwing' auf mein Ross dich nur schnell す早く私の馬にとびのり
Und küss' noch im Flug mich, wildschönes 走りながらキスをするのだ
Kind, かわいいおてんば娘よ
Geschwind, さあ、いそげ
Denn der Tod ist ein rascher Gesell. 死はす早い奴だから。

以上の二曲は同類の歌曲であるが、対象的である。第一曲は弱声で歌われるにもかかわらず、外指向的な働きを持ち、ピアノ部は、馬がすばやく疾走しているさまを描写しながら明かるい陽気さを表現している。そのことは譜例6に示されている。

しかし、第二曲は迫力ある大きさの独創的なスケッチを持っているが、馬の疾走をあらわすリズムや無気味な半音階のオクターブ奏法から抜けられた音節“erbeuten”“schreiten”は、戦場から逃走する切迫した危機感が主題で（譜例7）第一曲とは趣を異にする。ピアノ部は全曲を通して荒れ狂い、若干のアクセントから大声でわめきちらす。兵士を追うものは死である。この曲のものすごさは、歌声部とピアノ部における繰

(譜例 6)

(譜例 7)

(譜例 8)

denn der Tod ist ein ra-scher Ge-sell.
if were death here a min-ute to waste.

Edition Peters. 8246

り返しによって強まってゆく。最後は弱々しいつづやきとなり（譜例8），兵士達の最後を予感させる。

6 Nachtzauber

夜の魔法

Hörst du nicht die Quellen gehen
Zwischen Stein und Blumen weit
Nach den stillen Waldeseen,
Wo die Marmorbilder stehen
In der schönen Einsamkeit?
Von den Bergen sacht hernieder,
Weckend die uralten Lieder,
Steigt die wunderbare Nacht,
Und die Gründe glänzen wieder,
Wie du's oft im Traum gedacht.

岩と花の間を遠く
美しい孤独の中で
大理石像が立っている
静かな森の湖へそそぐ
泉の流れを、聞こえないだろうか？
太古の歌をめざめさせながら
不思議な夜は
ひそかに山を降りる。
そして、谷は再び輝く。
お前がよく夢に見たように、

Kennst die Blume du, entsprossen
In dem mondbeglänzten Grund?
Aus der Knospe, halb erschlossen,
Junge Glieder blühend sprossen,
Weisse Arme, roter Mund.
Und die Nachtigallen schlagen,
Und rings hebt es an zu Klagen,
Ach, vor Liebe todeswund,
Von versunk'nen schönen Tagen
Komm, o komm zum stillen Grund!

月の光に輝く谷に芽生える
あの花をお前は知っているか？
半分閉じた蕾から
若いからだが生きてと芽生える。
白い腕が、赤い口唇が。
そして夜鶯が鳴き
まわりでは、歎きはじめる、
あゝ、死ぬほどの恋から
沈み去った美しい日々から
帰ってこい、おゝこの静かな谷に！

ロマン主義歌曲の真価ともいうべき作品「夜の魔法」は夜の幻想をうたったもので、その特

徴は非常に繊細な響きにあるだろう。それはあくまでも自由で遠く未来の音楽を予測した。歌声部は情熱を抑制しながら、内気に、消えうせるように歌われる。それに対して、ピアノ部は響きの織物を見るような、そして新しいフランス的・印象主義的要素を聞けるように思われる。

(譜例 9)



7 Der Schreckenberger

助 け る 人

Aufs Wohlsein meiner Dame,
Eine Windfahn' ist ihr Panier,
Fortuna ist ihr Name,
Das Lager ihr Quartier!

私の貴婦人の健康を祝して
風見の旗が彼女の旗印
彼女の名は幸運の女神
陣営地が彼女の宿

Und wendet sie sich weiter,
Ich kümmer mich nicht drum,
Da draussen ohne Reiter,
Da geht die Welt so dumm.

彼女の気がどんなに変わっても
私はそのことで悲しんだりはしない
騎士なしで外へ出れば
世の中は色あせたものとなるだろう。

Statt Pulverblitz und Knattern
Aus jedem wüsten Haus
Gevattern sehn und schnattern
Alle Lust zum Land hinaus.

火薬の閃光や銃声のかわりに
荒れ果てた家々から
知人達がみつめ、しゃべり合う
全ての楽しみはどこかへいってしまう。

Fortuna weint vor Arger,
Es rinnet Perl' auf Perl':
„Wo ist der Schreckenberger?
Das war ein andrer Kerl!“

幸運の女神は腹を立て泣き出し
真珠の涙を流す
「助ける人はどこにいるのか?
彼は特別の男だった！」

Sie tut den Arm mir reichen,
Fama bläst das Geleit,
So zu dem Tempel steigen
Wir der Unsterblichkeit.

彼女は私に腕をさしのべると
風評の女神が随行していいふらす
そこで我々は不滅の神殿へと
のぼって行く。

30年戦争から、粗野で下品な兵士の現実的な姿を歌った「助ける人」は、幸運の女神「フォルテユナ」を自由に扱う兵士の自慢話である。ヴォルフはこの曲の演奏指示に、“Keck und verwegen”（いきおいよく、大胆に），“näselnd”（鼻声で歌う），“natürlich”（無邪気に），“pompös”（立派に）と示した。これらは彼が音楽に淫猥な描写を取り扱ったことを意味する。ピアノ部に於て、ffでオクターブの経過句が第一部を支配し、第二節以後はアルペジオ・コードが主をなす。和声的に轟然と鳴りわたり、ほゞえましい傲慢性も感じられる。突然、冒頭から歌い出される歌声部は、非常に上機嫌で、根本的に無頓着で、あからさまな気取りをもっている。最後の言葉“Unsterblichkeit”の強調された装飾音は、それを如実に物語っている。この曲集に於て、Der Schreckenbergerの後には、詩も音楽も前曲の補足とも思われるDer Glücksritterが並べられている。今度の兵士は大酒飲みで、貴婦人の護衛として写し出されている。

以上、アイヒェンドルフ歌曲集第一巻の中から、第7曲“Die Zigeunerin”を除いた他の曲を、詩と音楽について見てきた。確かに、神秘的な夜の世界は“sanft”に、そして“zart”に歌われていた。“Verschwiegene Liebe”や“Nachtzauber”には、シューマンが表現した以上の幻想を感じさせる時がある。しかし、特筆すべきことは兵士を取り扱った歌で、明るい陽気性と皮肉な諧謔性を表現したことである。その理由から、演奏への要求として、男性的に力強い表現を求められる。“Der Soldat II”や“Der Schreckenberger”等には、巾の広いバリトンの声質が適している。“Der Freund”にも、同様の声質が要求される。内容は正反対に真面目な友人の徳性を述べたものだが……。リズムは演奏家にとって、彼の解釈を左右すべく重要な問題である。各声部のリズム変化をもった“Das Ständchen”は、そういう理由から難曲視されている。この曲のリズムの主体性は伴奏者の左手におかれている。歌手はそのことを忘れてはいけない。曲集中最も繊細な曲“Nachtzauber”は、各演奏家の感性の世界にまかされている。《つづく》